









病害虫発生予察情報予報第 1 号（5 月の予報）




佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
水稲 (早期・早植え)	いもち病	<u>やや多</u>	 イネミズゾウムシ
	ばか苗病	並	
	イネミズゾウムシ	<u>やや多</u>	
	<p>1. 病害虫全般（いもち病、トビイロウンカ、イネミズゾウムシ等） 育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。</p> <p>2. 紋枯病 昨年本病の発生が多かったほ場では、紋枯病対象成分を含む育苗箱施用剤を使用する。</p> <p>3. スクミリングガイ 発生地域では被害を防止するため、移植後の浅水管理や薬剤防除、用排水路での貝及び卵塊の捕殺等を組み合わせた総合的な防除対策を地域ぐるみで徹底する。防除対策の詳細は、「スクミリングガイ防除対策マニュアル（農水省 HP）」を参照する。</p>		
水稲(普通期)	<p>1. いもち病 昨年発生が多かった地域では、菌密度が高まっているおそれがある。既存の剤にベノミル水和剤を加えた種子消毒を徹底する。また、育苗箱で種籾が露出すると本病が発生しやすいため、覆土を適正に行う。</p> <p>2. もみ枯細菌病 種子消毒を確実に実施する。さらに、育苗箱の覆土前にカスガマイシン液剤の散布を行うと防除効果が高まる。</p>		
タマネギ	べと病	中晩生	 べと病 二次感染株
	ボトリチス葉枯症	並	
	ネギアザミウマ	<u>やや多</u>	
	<p>1. べと病 中晩生品種では、5月上旬まで感染リスクがある。べと病は条件が整うと感染と発病を繰り返し急激にまん延するため、最新の気象予報を参考に降雨前の予防散布を徹底する（令和8年4月21日付け病害虫対策資料第2号参照）。早生品種の収穫の繁忙期であるが、中晩生品種の防除を継続する。</p> <p>2. ネギアザミウマ 本虫の食害によりできた傷口から腐敗病等の病害が発生しやすくなるので、本虫の防除を徹底する。</p>		
イチゴ (育苗圃)	うどんこ病	並	 ハダニ類
	ハダニ類	<u>多</u>	
	アブラムシ類	<u>やや多</u>	

	<p>1. ハダニ類 今後、気温の上昇に伴い、さらに増殖し防除が難しくなるので、早期発見、早期防除に努める。防除効果を高めるため、薬剤散布前に古葉を除去し、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。薬剤防除には、薬剤抵抗性の発達の可能性が低いとされる気門封鎖系薬剤を活用する。</p> <p>2. 炭疽病 近年、本病の発生が問題となっている。病原菌の伝染を防止するため、ビニル雨よけ育苗を行い、定期的な薬剤防除を実施する。また、過度な灌水は発病を助長するため、灌水はその日の天候やポットの乾き具合を考慮して実施する。</p>			
作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)	
キュウリ	べと病	やや少	 キュウリ黄化えそ	
	うどんこ病	やや少		
	褐斑病	多		
	灰色かび病	並		
	アザミウマ類	やや多		
	コナジラミ類	やや多		
	<p>1. 褐斑病 発病が多くなってからでは防除が困難となるので、発生初期から防除を徹底する。罹病葉は次作の伝染源となるので、圃場外へ持ち出し処分する。発病が多かったハウスでは、栽培終了後にハウス内と資材の消毒を行う。</p> <p>2. ミナミキイロアザミウマ：黄化えそ病、タバココナジラミ：退緑黄化病 一部の圃場でアザミウマ類及びコナジラミ類の発生が増加しており、ウイルス病の罹病株も散見される。栽培終了後に媒介虫がハウス外へ飛び出さないよう、作付け終了まで薬剤防除を徹底するとともに、栽培終了後はキュウリを株元から切るか、キルパー処理して枯らし、十分な期間を確保して施設の密閉処理（蒸し込み）を必ず行う。</p>			
トマト	葉かび病	やや少	 黄化葉巻病	
	灰色かび病	やや少		 黄化病
	コナジラミ類	多		
	<p>1. コナジラミ類：黄化葉巻病、黄化病 コナジラミ類の発生が増加しており、黄化葉巻病、黄化病も発生しているため、栽培終了まで施設内の防除を徹底する。また、栽培終了後は、施設の密閉処理（蒸し込み）を行い、飛び出し防止対策を徹底する。</p>			
アスパラガス	茎枯病	並	 ネギアザミウマ	
	褐斑病	並		
	斑点病	並		
	アザミウマ類	多		

	<p>1. アザミウマ類 気温の上昇に伴い、施設外からの飛び込みが多くなるため、虫見板への払い落としを行うなどして発生状況を確認し、発生初期からの防除に努める。</p> <p>2. 茎枯病、褐斑病、斑点病 晴天時には施設開口部を開放し、通風を図る。各病害とも予防散布を基本とし、発生前から3週間間隔を目安として薬剤防除を実施する。降雨日が続く場合や、前年多発生圃場及び既発生圃場では、散布間隔を短縮する。茎枯病については、降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐとともに、発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。</p>		
作物名	病虫害名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病虫害 (抜粋)
果樹全般	果樹カメムシ類	多	 チャバネアオカメムシ
	<p>1. 果樹カメムシ類 本年のチャバネアオカメムシの平均越冬虫数は平年より多いため、4~7月の本虫の発生量は平年より多いと予想される。なお、越冬密度は地域によって異なるため発生動向に注意するとともに、圃場をよく観察し飛来を確認したら早急に防除を行う(令和8年3月25日付け病虫害発生予察注意報第4号参照)。</p>		
カンキツ	そうか病	並	 カンキツ かいよう病
	かいよう病	多	
	灰色かび病	並	
	ミカンハダニ	やや多	
	チャノキイロアザミウマ	やや多	
<p>1. かいよう病 6月までは本病の重要な防除時期であり、前年発生した園、本病が発生しやすい園では防除を徹底する。</p> <p>2. 灰色かび病 古い花弁は発生源となるため、樹や枝をゆすり人為的に落とす。また、落花(果)防止のため満開期~落弁期、傷果防止のため一次落果期を中心に薬剤散布を行う。</p>			
ナシ	黒星病	並	<p>1. 黒星病 5月~6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する。ただし、長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。</p> <p>2. ナシヒメシンクイ 向こう3か月予報(4月21日発表)では、5~7月の気温は平年より高いと予想されており、多発するおそれがあるので今後の発生動向に注意する。</p>
	<p>1. 果粒の汚れ及び果粉の溶脱の防止 袋かけ前(大豆大期)に薬剤防除を行う際は、果粒の汚れ及び果粉の溶脱が少ない薬剤を選定する。</p>		
ブドウ	黒とう病	並	
	べと病	並	

キウイフルーツ	1. かいよう病 感染防止のため、6月まではすべての園で、銅水和剤を主体とした定期的な薬剤防除を実施する。また、幼木は成木に比べ発病しやすく、枝枯れや樹液の漏出など症状が激しいため、特に防除対策を徹底する。	 キウイフルーツ かいよう病	
作物名	病害虫名 ^{注1)}	5月の予想発生量 ^{注2)} (平年比)	予報対象の病害虫 (抜粋)
茶	カンザワハダニ	並	  カンザワハダニ チャトゲコナジラミ
	クワシロカイガラムシ	並	
	チャノキイロアザミウマ	並	
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	
	チャノホソガ	並	
1. カンザワハダニ 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にあるため、一番茶の摘採が遅い園では圃場観察を徹底し、農薬の使用基準に注意して防除を行う。また、一番茶摘採後に本種の発生が見られる園では追加防除を実施する。 2. クワシロカイガラムシ 幼虫ふ化期の予想は、嬉野地域では5月中旬頃（早場地域は5月上旬）である。園内でのふ化状況を観察し、ふ化最盛期の3～4日後に防除を行う。多発生の園では、一番茶摘採後に深刈り、中切り等の耕種防除も組み合わせる。 3. チャトゲコナジラミ 越冬幼虫から羽化した成虫の発生ピーク2週間後頃（目安としては成虫の発生が終った頃）の第一世代若齢幼虫の発生期に裾部を中心に防除を行う。また、耕種防除として裾刈りを行う。			

注1) 病害虫名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病害虫について「平年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「佐賀県病害虫総合防除計画」も参照してください。

病害虫総合防除計画掲載アドレス

<https://www.pref.saga.lg.jp/kijji003101844/index.html> 二次元コード→



II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
○ 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、（－）：少発生、（－～±）：やや少発生、（±）：並発生、（±～＋）：やや多発生、（＋）：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（4 ページの注釈にリンクがあります）。

写真

- 1～4 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。

5 月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 5 月の気象条件については、福岡管区気象台発表の 1 ヶ月予報（令和 8 年 4 月 16 日）を基に、「気温：平年より高い」、「降水量：平年並」と判断しています。

気象予報による要素別確率（%）及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	1 ヶ月予報における 5 月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い（少ない）	平年並 （佐賀市の平年値）	高い（多い）	
気温	10	20（20℃）	70	高い
降水量	30	30（182.9 mm）	40	並

Ⅲ. 5月の予報

水稻(早期・早植え)

[【概要に戻る】](#)

1. いもち病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1)前年の穂いもちの発生状況

令和7年産水稻での発生は、上場地域の早期水稻で平年より多く、北部山間の早植え水稻で平年よりやや少なかった。〈±～+〉

(2)5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件。〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)育苗箱施用剤は、薬剤の効果を確保するため、適正量をむらなく処理する。

(2)苗いもちがみられたら、早急に取り除くとともに防除を行う。

(3)水田周辺に放置された予備苗から葉いもちが蔓延することがあるので、補植後は早急に取り除く。

2. イネミズゾウムシ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1)前年の発生状況（越冬密度）

前年の発生は平年並で、越冬密度は平年並と考えられる。〈±〉

(2)5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件。〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)例年発生が多い地域では、本虫に登録のある育苗箱施用剤を使用する。

(2)越冬成虫は4月中旬～6月上旬に水田へ侵入する。本田での発生状況の把握に努め、成虫が10株当たり5頭以上みられたら、防除を実施する。

タマネギ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 10 圃場、
調査日：4月16日

1. べと病（中晩生）

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1)発生の現況

①定期調査

発生株率：6.0%（平年19.0%、前年0%）

平年比：やや少く（～±）

(2) 感染好適気象条件の出現状況

直近3週間（3月30日～4月20日）の県内及び隣接県の気象観測地点計4地点での気象解析の結果、感染および準感染好適条件が4月13～15日頃、19～20日頃に広域的に出現した（図2）（±～+）

(3) 5月の気象予報

降水量は平年並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 最新の気象予報を参考に降雨前の予防散布を徹底する。

(2) 降雨等により圃場条件が悪く、乗用管理機で防除ができない場合には、動力噴霧器または、無人航空機（ドローン）による散布で対応する。

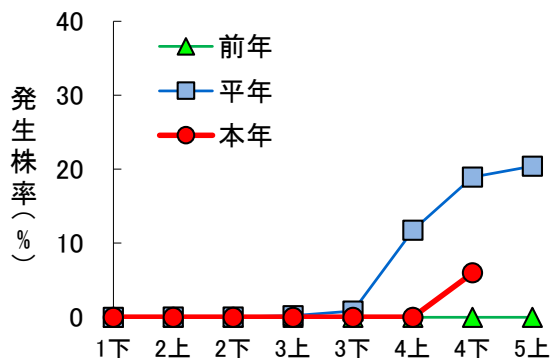


図1 中晩生タマネギでのべと病の発生

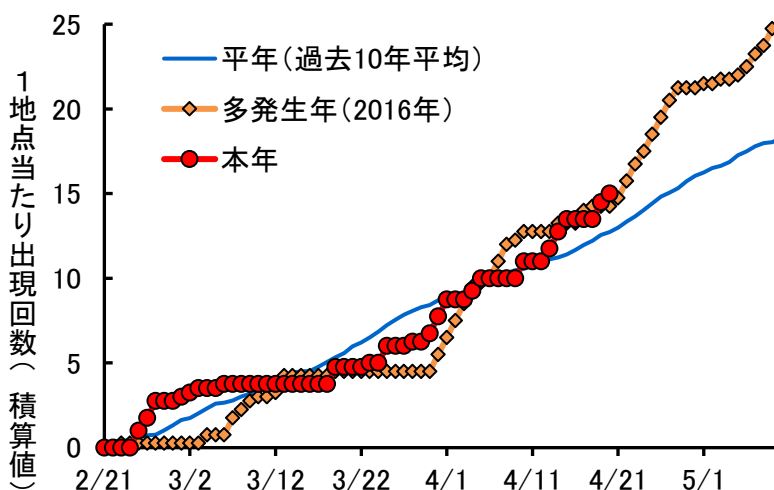


図2 タマネギべと病の感染・準感染好適気象条件の出現延べ回数

注1) 1地点当たりの感染・準感染好適条件の出現回数の積算値を示した。

注2) 感染・準感染好適条件が現れた場合、感染株では約2～3週間後から、初発生あるいは発病株（病斑数）の増加が予想される。

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：2.4%（平年9.0%、前年0%）

平年比：並く（±）

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 予防的な薬剤散布に努め、特に曇雨天が続くことが予想される場合は徹底する。

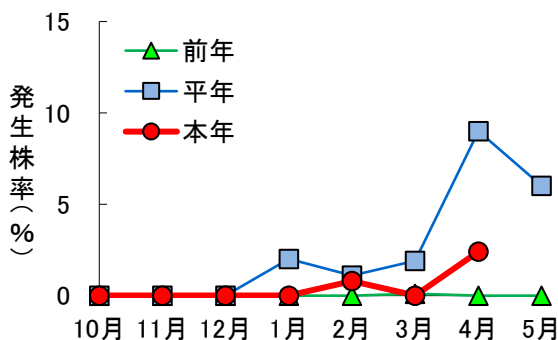


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移

3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：12.1% (平年16.3%、前年1.0%)

平年比：並(±)

(2) 5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+))

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生を認めた圃場では、低密度時から薬剤防除を行う。

(2) 本虫は薬液のかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、薬剤はそれらの部位にもかかるよう、生育に応じた十分量を丁寧に散布する。

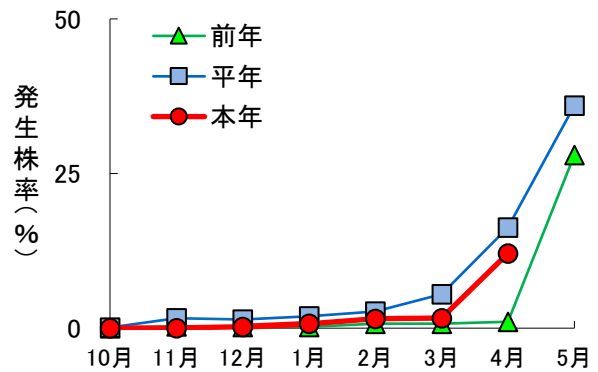


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移

イチゴ (育苗圃)

[【概要に戻る】](#)

定期調査 9 圃場

調査日：4月14～16日

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：20.0% (平年6.8%、前年33.5%)

平年比：多(+))

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生圃場では、系統が異なる薬剤を組み合わせ、5～7日間隔で防除を実施し、密度低下を図る。

(2) 薬剤散布前に古葉を除去し、下葉や葉裏まで薬液が付着するように十分量を丁寧に散布する。

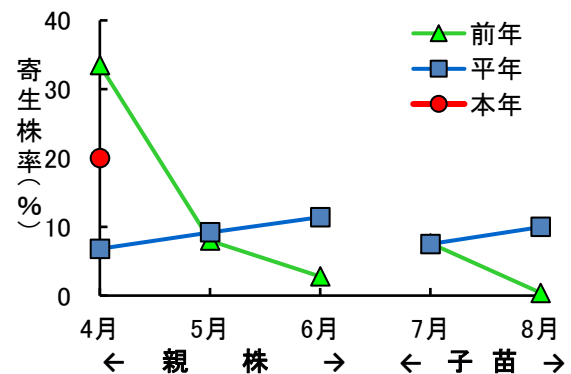


図1 ハダニ類のイチゴ育苗圃での発生推移

2. アブラムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生株率：16.9% (平年8.5%、前年7.5%)

平年比：やや多(±~+)

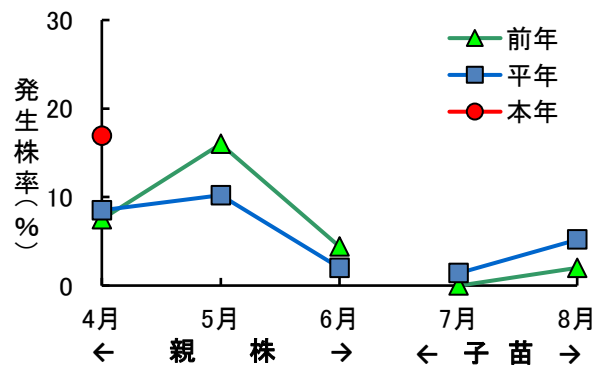


図1 アブラムシ類のイチゴでの発生推移

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 圃場周辺の雑草は本虫の発生源となるため、除草を行う。
- (2) 早期発見、早期防除に努める。

キュウリ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 5 圃場、
調査日：4月14～17日

1. 褐斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：18.0% (平年 4.2%、前年 3.0%)

平年比：多 (+)

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件 (±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 不要な下葉は除去し圃場外で適切に処分する。
- (2) 少発生のうちから定期的な薬剤防除を行う。

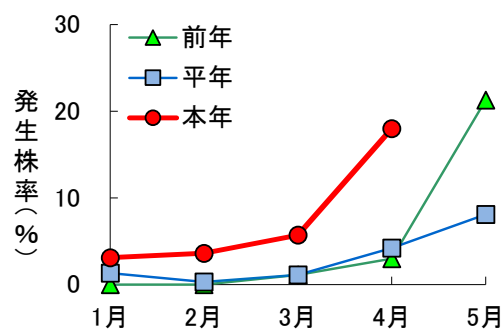


図1 キュウリ褐斑病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：18.0% (平年 7.5%、前年 38.0%)

平年比：やや多 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温の上昇に伴い、施設内の害虫の増殖が盛んになるとともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。
- (2) ミナミキイロアザミウマは黄化えそウイルスを媒介するため、早期発見、早期防除に努める。また、罹病株は伝染源となるので、圃場外に持ち出し、適切に処分する。
- (3) 栽培終了後に媒介虫がハウス外へ飛び出さないよう、作付け終了まで薬剤防除を徹底するとともに、栽培終了後はキュウリを株元から切るか、キルパー処理して枯らし、十分な期間を確保して施設の密閉処理 (蒸し込み) を必ず行う。

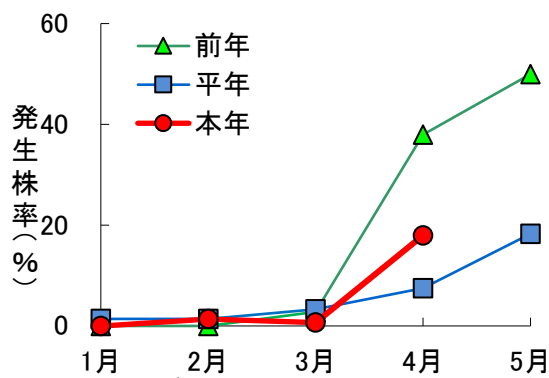


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：10.0% (平年 4.8%、前年 18.0%)

平年比：やや多 (±~+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 気温の上昇に伴い、施設内の害虫の増殖が盛んになると

ともに、施設内への飛び込みが増加する。多発生を防ぐため、低密度時からの薬剤防除を行う。

(2) タバココナジラミは退緑黄化ウイルスを媒介するため、早期発見、早期防除に努める。また、罹病株は伝染源となるので、圃場外に持ち出し、適切に処分する。

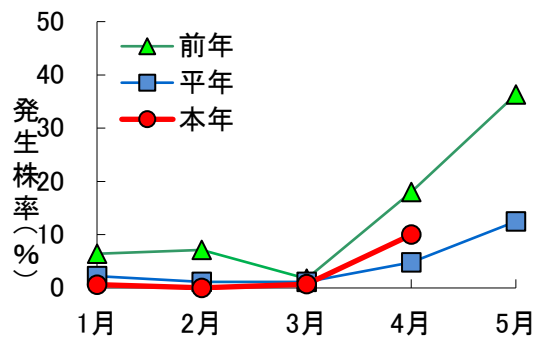


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

トマト

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6 圃場

調査日：4月14~16日

1. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

発生株率：20.0% (平年 8.1%、前年 13.3%)

平年比：多 (+)

(2) 5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件 (+)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 栽培終了まで防除対策を徹底する。また、幼虫・蛹の多い下葉を除去し、密度を下げたうえで、薬剤防除を行う。

(2) 栽培終了後にハウス外へ飛び出さないよう、栽培終了後は株元から切るか、キルパー処理をして枯らし、十分な期間を確保して施設の密閉処理 (蒸し込み) を行う。

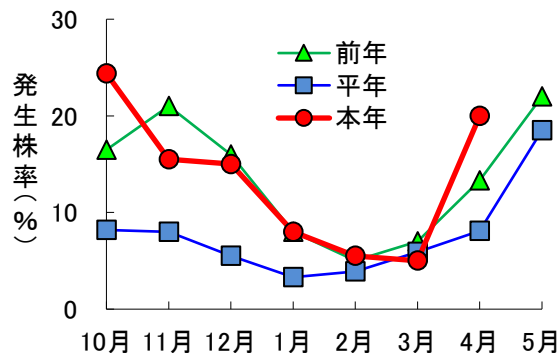


図1 コナジラミ類のトマトでの発生推移

アスパラガス

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場

調査日：4月14～16日

1. 茎枯病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生茎率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 降雨時にサイドビニルを降ろし、雨の降込みを防ぐ。
- (2) 発病茎は見つけ次第、除去し適切に処分する。

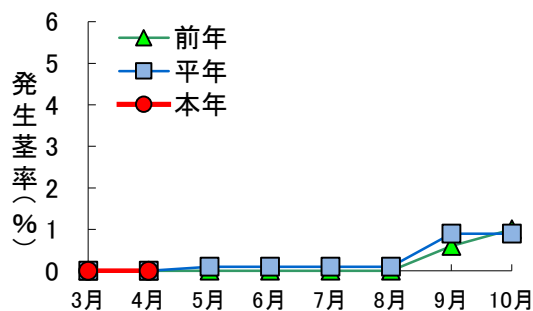


図1 アスパラガス茎枯病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生株率：20.0%（平年10.0%、前年0%）

平年比：やや多（±～+）

(2) 5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 気温の上昇に伴い、施設外からの飛び込みが多くなるため、虫見板への払い落としを行うなどして発生状況を確認し、発生初期からの防除に努める。

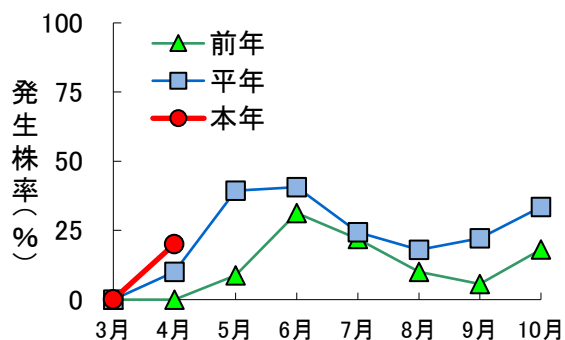


図1 アスパラガスでのアザミウマ類の発生推移

果樹全般

[【概要に戻る】](#)

1. カメムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) チャバネアオカメムシの越冬状況調査（表1）

① 越冬地点率：88.2%（平年44.1%、前年29.4%）

平年比：多（+）

② 平年越冬虫数：2.51頭/m²（平年0.32頭/m²、前年0.14頭/m²）

平年比：多（+）

(2) 5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本年のチャバネアオカメムシの平均越冬虫数は平年より多いため、4～7月の本虫の発生量は平年より多いと予想される。なお、越冬密度は地域によって異なるため発生動向に注意するとともに、圃場をよく観察し飛来を確認したら早急に防除を行う（令和8年3月25日付け病害虫発生予察注意報第4号参照）。

表1 チャバネアオカメムシの越冬状況¹⁾

調査地域	本年 ²⁾	平年 ³⁾	前年	多発年 (H30)
	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²	頭/m ²
みやき町	4.3	0.4	0	1.0
神崎市	11.7	0.6	0.7	0.7
佐賀市	2.0	0.2	0.3	0
小城市	0	0.1	0	0
多久市	0	0.2	0	1.0
唐津市1	4.0	0.5	0	0
唐津市2	0.3	0.3	0	0.3
伊万里市1	1.0	0.0	0	0
伊万里市2	2.3	0.4	0	0.7
伊万里市3	0.7	0.3	0	1.3
武雄市1	2.0	0.2	0	0.3
武雄市2	0.3	0.5	0.3	1.3
鹿島市1	1.0	0.5	0.7	1.3
鹿島市2	2.3	0.7	0.3	2.7
鹿島市3	1.3	0.4	0	0.7
太良町1	1.0	0.0	0	0
太良町2	8.3	0.4	0	1.3
平均	2.51	0.32	0.14	0.70
越冬地点率(%)	88.2	44.1	29.4	68.4

1) 各地点3カ所(1m²/1カ所)の落葉中の越冬虫数の平均

2) R7年12月に常緑樹林の落葉を採集して調査

3) 平年値はH28～R7の10年間の平均

カンキツ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：8圃場

調査日：4月16日～4月17日

1. そうか病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並〈±〉

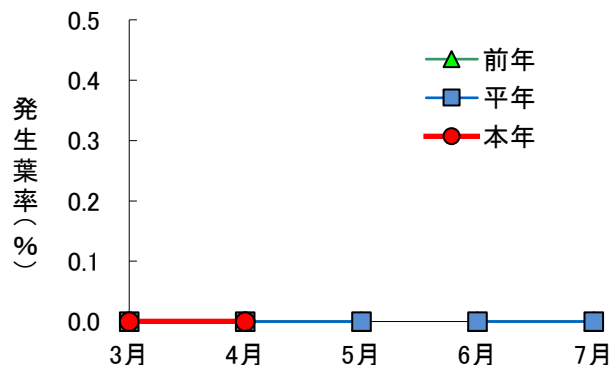


図1 カンキツそうか病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 果実への感染を防止するため、落弁期に防除を行う。

(2) 果実に葉害を生じる場合があるため、落弁期以降にデランフロアブルとマシン油乳剤の混用又は近接散布は行わない。

2. かいよう病

1) 予報の内容

発生量：平年より多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生葉率：0.14% (平年0.01%、前年0.01%)

平年比：多〈+〉

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 前年発生した園や風当たりが強い園、罹病性品種(レモン、ネーブル、はるみ等)の植栽園、新梢の伸長が遅くまで続く園(幼木園、高接園、隔年交互結実栽培園等)など本病が発生しやすい園では、無機銅剤水和剤(クレフノン200倍加用)またはICボルドー66D(必ずアビオンE1,000倍を加用)を散布する。散布間隔の目安はクレフノン200倍加用無機銅水和剤で20~25日で、ICボルドー66Dの場合は30日である。

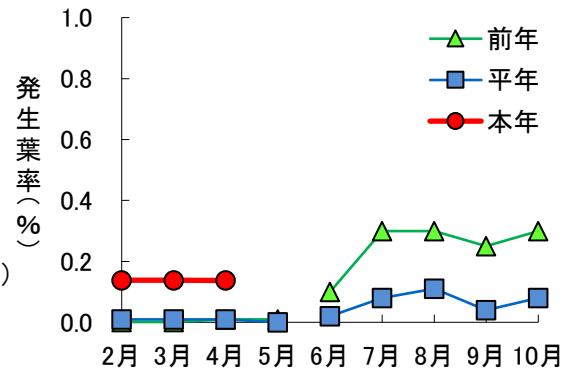


図1 カンキツかいよう病の発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

3. 灰色かび病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 温州みかんの着花状況

今年の着花数は平年並〈±〉

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件〈±〉

3) 防除上注意すべき事項

(1) 古い花卉は発生源となるため、樹や枝をゆすり人為的に落とす。

(2) 落花(果)防止のため満開期~落弁期、傷果防止のため一次落果期を中心に薬剤散布を行う。

4. ミカンハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1参照)

発生葉率：6.9% (平年9.0%、前年2.0%)

平年比：並〈±〉

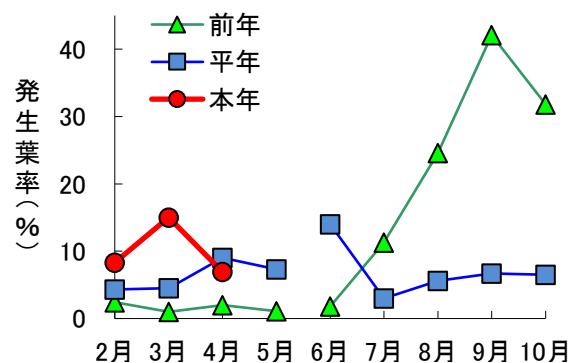


図1 ミカンハダニのカンキツでの発生推移

注) 5月下旬までは旧葉を調査

(2)5月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)殺ダニ剤に対する感受性の低下を避けるため、4月~6月下旬はマシン油乳剤の使用を基本とする。ただし、樹勢が低下している樹や着花が少ない樹では、マシン油乳剤の散布を控え、殺ダニ剤で対応する。

5. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①黄色粘着トラップ (図1参照)

平年比：並〈±〉

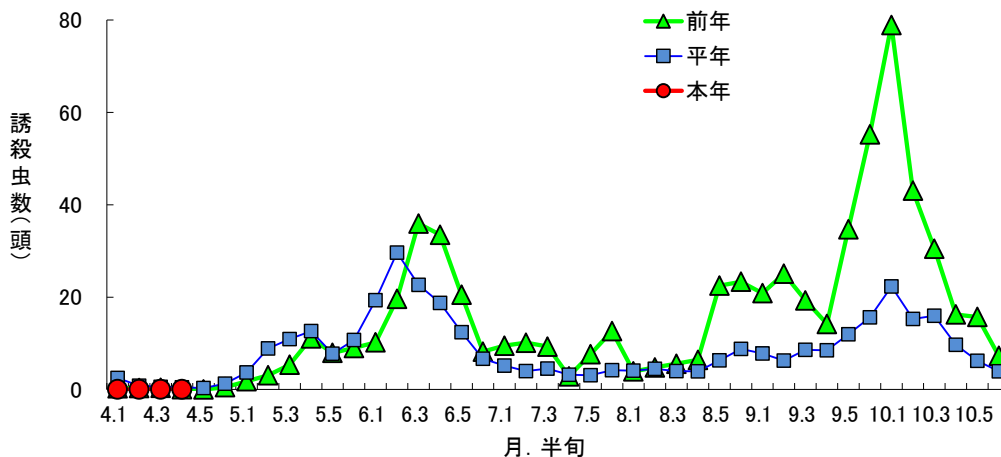


図1 黄色粘着トラップによるチャノキイロアザミウマの誘殺数の推移 (果樹試験場調査)

(2)5月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件〈+〉

3) 防除上注意すべき事項

(1)5月中旬~6月は本種の重要な防除時期であるため、防除を徹底する。

(2)本種の発生源となるイヌマキ、サングジュ等を防風樹として植栽している園では特に発生に注意し、防除を行う。

ナシ

[【概要に戻る】](#)

定期調査 (5圃場)

調査日：4月20日

1. 黒星病

1) 予報の内容

発生量：平年並

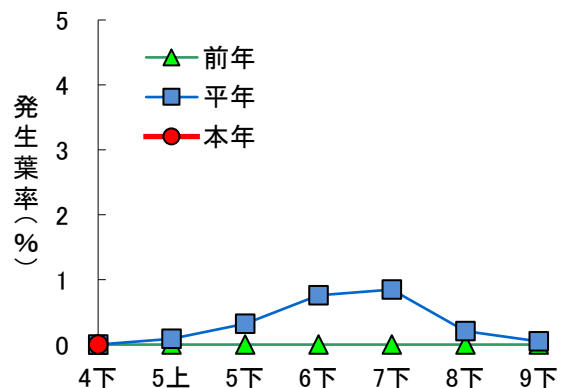
2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①定期調査 (図1、2参照)

発生葉率：0% (平年0%、前年0%)

平年比：並〈±〉



発生果率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月～6月中旬までの薬剤防除は、原則的に保護殺菌剤を使用する。ただし、長雨等で薬剤散布ができなかった場合はDMI剤を散布する。

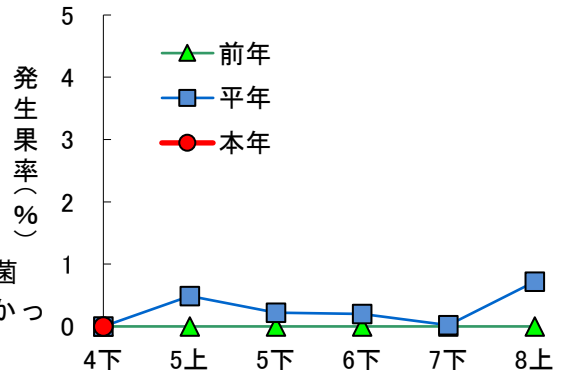


図2 ナシ黒星病（果実）の発生推移

ブドウ

[【概要に戻る】](#)

定期調査：6圃場

調査日：4月16日～4月20日

1. 黒とう病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 罹病枝の剪除と巻きひげの処分を徹底する。

(2) 新梢・新葉への感染を防ぐため、萌芽期～新梢伸長期に防除を行う。

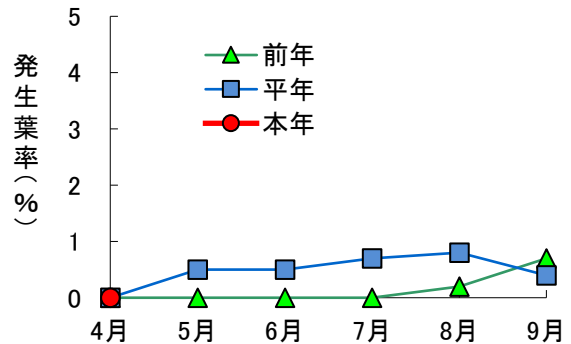


図1 ブドウ黒とう病の発生推移

2. べと病

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：0%（平年 0%、前年 0%）

平年比：並（±）

(2) 5月の気象予報

降水量は並で、並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 伝染源となる罹病葉は必ず除去し、園外に持ち出して適切に処分する。

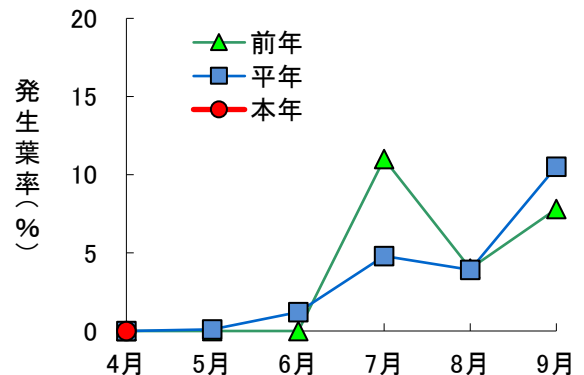


図1 ブドウべと病の発生推移

茶

定期調査：7圃場

調査日：4月16日～4月17日

1. カンザワハダニ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（図1参照）

発生葉率：2.0%（平年 4.1%、前年 1.1%）

平年比：やや少（-～±）

(2) 5月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 被覆栽培はカンザワハダニの発生を助長する傾向にあるため、一番茶の摘採が遅い園では圃場観察を徹底し、農薬の使用基準に注意して防除を行う。

(2) 一番茶摘採後に本種の発生が見られる園では追加防除を実施する。

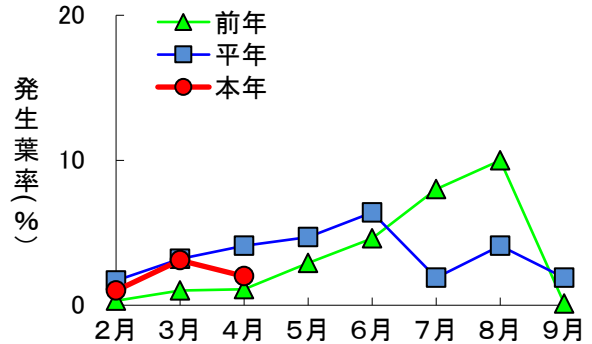


図1 カンザワハダニの茶での発生推移

2. クワシロカイガラムシ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査（H30年より雌成虫の調査追加、平年値はH30～R7の8か年平均）

発生株率（雌成虫）4.3%（平年 14.6%、前年 12.9%）

平年比：少（-）

発生圃場率（雌成虫）は 42.9%

※雌成虫の越冬量が第一世代の発生量に影響する。

(2) 5月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件（+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫ふ化期の予想は、嬉野市では5月中旬頃（早場地域は5月上旬）である。園内でのふ化状況を観察し、ふ化最盛期の3～4日後に防除を行う。

(2) 多発生の園では、一番茶摘採後に深刈り、中切り等の耕種的防除も組み合わせる。

3. チャノキイロアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：0頭/4ヶ所 (平年0.7頭、前年0.3頭)

平年比：やや少く(～±)

(2) 5月の気象予報

気温は高く、降水量は並で、多発生の条件(+))

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月上～中旬頃にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

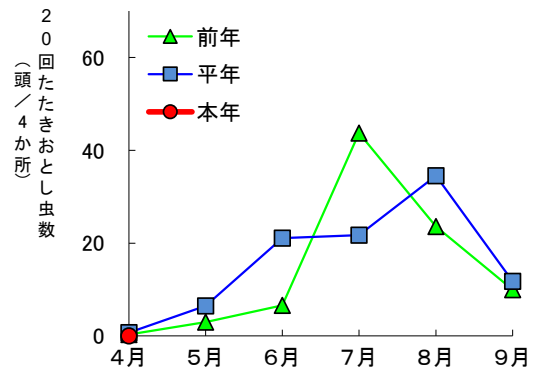


図1 チャノキイロアザミウマの茶での発生推移

4. チャノミドリヒメヨコバイ

1) 予報の内容

発生量：平年並

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

① 定期調査 (図1 参照)

虫数：0頭/4ヶ所 (平年0.2頭、前年0.1頭)

平年比：やや少く(～±)

(2) 5月の気象予報

気温は高く、多発生の条件(+))

3) 防除上注意すべき事項

(1) 5月中～下旬にかけて発生が増加するため、一番茶摘採後、二番茶萌芽～開葉初期の防除を徹底する。

(2) 幼虫は葉裏に生息することが多いため、葉裏へ薬剤が十分にかかるように丁寧に散布する。

(3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

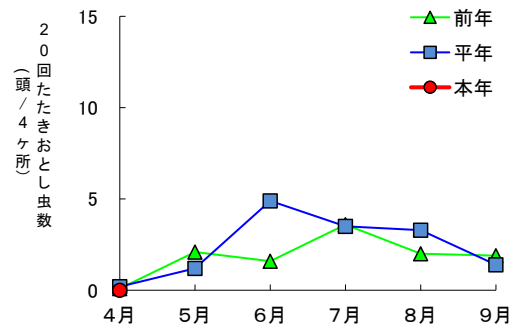


図1 チャノミドリヒメヨコバイの茶での発生推移

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部

〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088

TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085

Mail nougyougi_jutsu@pref.saga.lg.jp

ホームページアドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>

病害虫総合防除計画掲載アドレス <https://www.pref.saga.lg.jp/kiji003101844/index.html>

防除セ二次元コード



防除計画二次元コード

